

書 評

福建師範大學中文系
古典文學教研室選注 『清詩選』

北京 人民文學出版社 一九八四年三月 目錄一九頁、
前言一五頁、本文五四七頁

中國におけるほぼ十年來の中國古典文學に關する旺盛な
刊行事業は、もとより清代の個々の詩人にも及び、基礎的
な事業である別集の刊行としては、『中國古典文學叢書』⁽¹⁾に
黃景仁など數家、『清人別集叢刊』⁽²⁾には周亮工・金人瑞・納蘭
性德・朱彝尊など十七家がすでに收められ、他方、選注や箋
校を施したものととしては、顧炎武・吳嘉紀・嶺南三家（梁佩
蘭・屈大均・陳恭尹）・王士禎・趙執信・龔自珍・林則徐・魏源な
どに亘っている。清詩の選注書である本書は、ついに出る
べくして出たと言ふべきである。

ある斷代の詩の選擇がどれほど行われるかということとは、
個々の詩人の場合と同様に、その對象への親近度と研究の

深淺度を如實に反映する。しかして中華民國成立以來の中國
人研究者の手になる清詩の選注については、わずかに民
國時代の王文濡『清詩評註讀本』⁽³⁾七一家四〇〇餘首と、臺
灣省における吳通生『清詩選』⁽⁴⁾一八八家五九〇餘首がある
だけで、人民共和國のもとでは、陳友琴『元明清一百首』⁽⁵⁾
に錢謙益以下四三家七一首を收めるにすぎない。したがっ
て本書が一五八家五七五首の詩を選んで比較的詳しい注釋
を施したことにたいして、私は待望久しき喜びを感じるの
である。ちなみに日本における出版には、近藤光男『清詩
選』⁽⁶⁾五七家一三〇首、松村の「清詩」⁽⁷⁾に二五家五三首、村
山古廣『清詩』⁽⁸⁾五五家一三一首、などがある。

さて清代約二七〇年の間に一首以上の詩をもつて登記さ
れる詩人の數は、全國的また地方的規模の目睹しうる約一
〇〇種の總集のうちの四七種から計上しただけでも、すで
に三萬家を超える。現在までの最も充實した選本である徐
世昌『晚晴移詩匯』⁽⁹⁾二〇〇卷にして、收録人數はその約五
分の一の六一六八家にとどまる。まして詩篇の數にすれば
およそ大海としか表現できないものなから、きわめて

大規模にして嚴密な検討を経て選本を編輯するということは、空想に等しいことになろう。ということとは逆に、各種の選本ないしは文學史によって大家ないしは名家として大方の評判の定まった約三〇家の詩人を除いて、他に誰を、あるいはどの詩を選ぶかについては、ひとえに選注者の大膽な判断にゆだねられるということをも意味する。事實、本書における選人選詩においてもいくつかの興味ぶかい特徴がみられるので、折りおりに觸れることにしたい。

本書の詩人の配列は判明するかぎりにおいて生年の前後にしたがっており、時代の流れと個々の詩人の思想との關係を追うのに都合がよい。便宜上、一五八家の配列順に通し番號を附したうえで、選注者「前言」のグループ分けにしたがって、そのなかでの諸々の特徴を私なりに整理するとともに、少々の疑義をも呈しておきたい。

陳祥耀氏の「前言」によれば、本書の詩人たちは、
A：「清初の詩人」

B：「清朝の科擧に應じて仕官し、主に康熙・雍正期に生

書評

きた詩人」

C：「乾隆・嘉慶期の『盛世』の詩人」

D：「道光・咸豐期」の詩人

と、四期に分けられる。しかしAとBは時間上の區分というよりむしろ詩人の生きかた、ないしは作品の傾向による區別であつて、例えばAに屬する詩人は、1林古度・7閻爾梅・8傅山に始まり、13黃宗羲・24顧炎武を経て、63屈大均・66陳恭尹にまでつづくが、その間には、清朝に再仕した2錢謙益・12吳偉業・21周亮工・26龔鼎孳が介在し、一方BではAの一部の詩人よりは年長の25宋琬、30施閏章らが前列を占めるからである。したがって明清交替期の詩人たちを單純に時代順に並べたとき、かえつて文學史では見落されがちの、個々の詩人がさまざまに混ざりあつた一種の間模様を展開する。本書はこのような興味をかなり餘裕のある分量でもって呈示してくれる。それもそのはずで、本書では全一五八家のうち一六四四年以前に生まれた詩人が約半數、79吳雯まで續き、これに「清初」の詩人とされる87孔尚任、93納蘭性徳も加えれば、⁽¹⁰⁾實に全體の五分の三ま

だが、AとBに屬する詩人たちによって占められているからである。その間、たとえば9商景蘭、10江陰女子といった無名の女性詩人の詩を選んだことは、その餘裕の一端ではあるが、作詩人口の層の厚さと、この場合は反清氣分の深刻さとを反映していて、きわめて効果的である。

清代初期、つまり一六四四年の清朝成立ののち雍正期が終るまでの九〇年間の詩の主要なテーマを私なりに整理するならば、前半は清朝への抵抗ないしは非協力であり、後半は新王朝への協力を前提としたうえでの舊王朝への愛惜、あるいは現實の民生にたずさわるうえでの苦痛であるともう。そしてそれぞれを本書のAのグループとBのグループに割りふることが許されるとおもう。いずれの場合も作詩の方向が比較的明白であるだけに、本書に選ばれた詩篇を通して、共通の語彙、つまり一種のキーワードがいくつか浮かびあがってくることになる。例示してみよう。

(1)「日月」 2 錢謙益「後秋興之十三」(八首其二、七頁)の句、

吹殘日月是胡笳 日月を吹殘するは是れ胡笳なり

にたいして、選注者は「日月は合わせると「明」の字になり、明朝を指す。胡笳は……ここでは滿族を指す」と注する。とするならば、34張煌言「甲辰八月辭故里」(二九頁)の、

日月雙懸于氏墓 日月雙つながら懸る于氏の墓

も、明の英宗時代の土木の變に際して蒙古族の侵入に抵抗した于謙をたたえるものであるだけに、表面の意味は「于謙の功績が日月のように輝いている」(選注者)ことであるとしても、やはり「明」の字を隠しもっていると考えてよいだろう。また63屈大均の「通州望海」(一九二頁)で、日本に亡命した5朱舜水について、

日月相吞吐 日月 相い吞吐し

乾坤自混茫 乾坤 自ずから混茫たり

と歌うのにも、「大海の眺めの限りない廣さと雄壯な現象をえがく」(選注者)ほかに、大海のむこうに「明」の一遣臣の見え隠れする姿を想いえがいていると解するのがふさわしいだろう。日月の合成とはあまりにも單純な理屈ではあるが、特に清代初期の詩人の作品においてはたしかに注

意に値する用語である。ちなみに、より直接的な「明」の字についても、孔立『清代文字獄』(二〇頁)は呂留良の、

清風雖細難吹我 清風は細しと雖も我を吹き難く

明月何嘗不照人 明月は何ぞ嘗て人を照らさざる

の詩句が、それぞれ清朝と明朝とを指すとする。⁽¹¹⁾

(四)「朱鳥」 選注者は1林古度の紹介(二頁)で、69王士禛が「その墓に題した詩」として「聞林茂之先生已葬鍾山」⁽¹²⁾

の二句、

老尙歌朱鳥 老いて尙お朱鳥を歌い

魂應拜杜鵬 魂は應に杜鵬を拜すべし

を引く。この「朱鳥」は朱雀に同じく、元來は南方七宿の總稱であるが、13黄宗羲「卧病旬月末已、閑書所感」(五〇頁)の、

天末招魂鳥降筵 天末に魂を招けば鳥 筵に降る

に、選注者が「朱鳥が祭筵の上に降臨すること」であるとしたうえで、南宋の遺民である謝翱が文天祥を祭哭したときに、「登西臺慟哭記」で「化爲朱鳥兮有味焉食(化して朱鳥と爲るも味有りて焉をか食わん)」と歌ったことを指摘す

書 評

るように、遺民にとっては民族的抵抗を象徴する由緒ある詩語なのであり、まして明の遺民にとっては舊王室の姓氏にも重なるものである。ちなみに王士禛の句の「杜鵬」も亡帝を追慕することから、この頃の詩に頻出し、また66陳恭尹の「木綿花歌」(二〇九頁)にみえる「丹鳳」も、「暗に朱姓の人を指す」(選注者)ものである。

(六)「落花」 詩題として、22歸莊「落花詩」(七三頁)や、33王夫子「正落花詩」(二六頁)、「補落花詩」(二二七頁)に代表されるほか、詩句のなかにも、63屈大均「秣陵」(一八八頁)、66陳恭尹「木綿花歌」(二〇九頁)、67惲格「同李非夏『湖山晚眺』」(二二一頁)などに見られる。

以上のごとく前王朝にたいする懷舊の念を自然物に假託する一方で、歴史に題材をとるのもこの時期の特色である。いわゆる咏史詩に關して「前言」は十八世紀以後のこととして言及するが、私は本書に採録された詩篇を見るかぎりにおいても、その盛んな製作は、異民族支配にたいする不服従の決意、あるいは服従を餘儀なくされた痛恨などにも

とづいて、清朝成立の當初から、つまり十七世紀後半においてもおこなわれたと考える。その場合、大別して服従か不服従かの詩人の立場によって視點の向けかたが異なり、たとえば、

(一) 伍子胥 についていえば、12 吳偉業の「伍員」(四七頁)では、「覆楚」に成功したあと吳王夫差から屬鏤の劍を賜わったときの遺恨の念に焦點をあてるのにならして、もっぱらその復讐に重點をおくのが、さきにもあげた34張煌言「甲辰八月辭故里」(二一九頁)であり、50 王攄の「謁伍相祠」(二五九頁)である。また66陳恭尹「虎丘題壁」(二〇四頁)では、吳に亡命して「乞食」する伍子胥を「自分が家族を棄てて遠く離れた異郷をさまよう」(選注者)情況になぞらえる。このように、史料としてその意味が輻輳するものが選ばれることもあるが、Aグループの詩人においてはあまり一般的ではない。したがって、

(二) 蘇武 といえは、12 吳偉業「讀史雜感」(四〇頁)の、

空餘蘇武節 空しく餘す蘇武の節

のように、南明の福王から清朝への使者にたたされた左懋

節になぞらえられ、14 杜濬「晴」(五四頁)では、

白頭蘇屬國 白頭 蘇屬國

と、自己の不服従精神の權化とされる。また、

(三) 「美新」 は、揚雄が「劇秦美新」の文によって王莽の新に媚びたことを借りて清朝出仕者への當てつけとする8 傅山の「客孟」云々の詩(二三頁)、14 杜濬「樓雨」(五三頁)などにその例がみえる。

ちなみにこの時期にかぎらず清詩全般における故事の盛んな使用は、滿州王朝にたいする漢族知識人の文化的誇示のあらわれではないかと、私はひそかに推察するが、44 陸次雲の七言絶句「咏史」(二五〇頁)が、その前二句の秦始皇帝の焚書坑儒に對置して、後二句で陸賈と漢高祖との故事を用いて、

尙有陸生坑不盡 尙お陸生の坑し盡さざる有り

留他馬上説詩書 他を馬上に留めて詩書を読む

としたのは、そのような意識の表現ではあるまいか。

ところで「前言」は、唐詩にたいして宋詩が「民族的矛盾の反映と藝術的な特長の面ですれなりに新しい成果があ

った」(二頁)と指摘するが、その民族的矛盾の史實を、清詩は特にこの時期にしばしば詩材に登用させる。當然のことながら北宋末の北方異民族との抗争が熾烈になってからの人物で、たとえば金の兀朮を破った武將韓世忠は、31尤侗「題韓斬王廟」(二二〇頁)、85潘耒「金山」(二六六頁)に、金主亮の南下を退けた虞允文は、24顧炎武「榜人曲」其一(八六頁)に、元の追撃にあつて廣東の「崖山」で幼君を背負つて入水した陸秀夫は、2錢謙益「後秋興之十三」(七頁)、顧炎武「井中『心史』歌」(九三頁)、66陳恭尹「崖門謁三忠祠」(二〇三頁)、潘耒「羊城雜詠」(二六五頁)に、元の大都不服従を貫いて殺された文天祥は、顧炎武の「榜人曲」其二(八六頁)、33王夫子「讀『指南集』」(二四頁)、76邵長蘅「題冀渭公所藏楊忠愍梅花詩卷」(二四五頁)などに歌われ、この延長線上に、『武林舊事』の著者周密についての13黃宗義「周公謹硯」(五二頁)や、ひいては陸游についての36孫枝蔚「陸放翁硯歌、爲畢載積題」もあると思われる。これらの詩は、錢氏の「後秋興」詩が「明の永曆帝朱由榔が緬甸で殺され南明が滅亡したことを詠んだもの

書評

である」(選注者)とか、顧氏の「榜人曲」が「船頭の口吻をかりて江南の人民の抗清の意思を表明したものである」(同)とか指摘されるように、詩人の意圖するところは直接的で解りやすい。しかし後でとりあげるように、同じ史料であっても、それがCグループの詩人たちによってとりあげられるときには、思想統制との關聯もあつて、はなはだ整理しがたい事態が生ずる。

つぎにBのグループの詩人について「前言」は、「この時期の第一流の詩人」(六頁)としてまず69王士禛を推す。この詩人への評價は、かつては「反動流派」⁽¹³⁾とか、「意識するにしろしないにしろ太平の世相を謳歌し、人民の生活を反映した作品は少ない」⁽¹⁴⁾などと、かなり冷やかなものであつたが、本書は「前言」で、「王氏の七言近體と吳偉業の七言歌行とは清詩のなかで最も獨壇場的であり、影響も最も大きい作品である」(六頁)と指摘したうえで、「王氏は、清朝の支配が鞏固なものとなり、表面上は太平であつた時期にあつて、杜甫のごとく現實を大いに暴露し批判する道

を歩むことは、政治的な條件のうえで容れられなかった」

(七頁)と認めている。ある古典的世界の詩人を一定の理念に基いて裁断するのではなく、いったんは歴史的な情況において觀察しようとする柔軟さを本書がそなえている一つの證左である。王詩の採録が89查慎行の二八題三四首について多い二四題二八首という數にのぼっていることから、選注者の王氏再評價の意圖を、私はくみとりたいたい。

王詩の、いわゆる「神韻」という語に集約される趣向も、杜甫の詩に近いとされる入蜀後の作の傾向も、採録された作品によってかなり明らかではあるが、他の詩人の紹介な作品に散見する彼の交際の廣さを通じて、もとより『感舊集』などの雜著にあらわれるごく一端にすぎないとしても、その詩人像なり作品傾向を側面から補うことができる。たとえば「林古度について、先述のように「朱鳥」の語でもって追悼したほかに、『池北偶談』卷一七「林茂之」の項に本書の林詩「金陵冬夜」(二頁)を引用するのは、節をまげずに清貧をつらぬく明の遺民にたいする王氏の畏敬の念の表われであろう。また、26龔鼎孳「上巳將過金陵」(一

〇三頁)の二句、

興懷無限蘭亭感 興懷限り無し蘭亭の感

流水青山送六朝 流水青山 六朝を送る

が「王士禛に稱贊された」(選注者)ことは、王氏の「神韻」がしばしば古代への追慕からもたらされるものであることを物語るであろう。語は、直接には兄王士禛が「才子の語り」と評したこととして、やはり『池北偶談』卷二「龔陳詩」、また『漁洋詩話』⁽¹⁶⁾卷中に見える。さらに王氏がいかに無名の詩人を顯彰したかを裏づける例として、28吳嘉紀など本書で觸れられない人は措くとして、46費密「朝天峽」(二五五頁)の二句が「一時、口々に傳誦されたことがある」(選注者)のは、『池北偶談』卷一一「費密」の項によると、王氏がこの詩人を發見するさっかけになったものであり、さらに『漁洋詩話』卷上には、王氏自身がこの二句を折りこんだ五律「讀費密詩」を作ったいきさつを述べている。⁽¹⁷⁾

そのほか、女流詩人の71紀映淮の「秦淮竹枝詞」を踏まえて王氏が「秦淮雜詩」十四首の其十四を作ったという選注者の説明は、『池北偶談』卷一一「紀映淮」と『漁洋詩話』

卷上に見える。⁽¹⁸⁾ 77王又旦の「曉渡望鄂州」詩の三・四句は、

選注者の言及が無いが、『漁洋詩話』巻中に、「古人の少く所」と稱賛されるものである（ちなみに『清詩別裁』巻五にも、「神勇なり」と評される）。88潘高への評語は選注者の指摘のとおり『漁洋詩話』巻上に見える。女流の91王慧が「王士禛に賞識されたことがある」（選注者、二九六頁）のは、『池北偶談』巻一七「王慧詩」にもとづく。

さて、王氏の代表作「秋柳」詩（二二六頁）に關聯してもすこしく觸れておこう。

山東濟南の大明湖に關して、本書ではこの詩の前に29申涵光の「泛舟明湖」（一一三頁）が用意されているが、そのうちの二句、

歷下人家十萬戶 歷下の人家 十萬戶

秋來都在雁聲中 秋來 都て雁聲の中に在り

の「十萬戶」は、選注者の指摘が無いが、金・元好問の「歷下亭懷古、分韻得南字」（五古二八句）の、

承平十萬戶 承平たり十萬戶

他州隔仙凡 他州 仙凡を隔つ

書 評

に出ること明きらかである。⁽¹⁹⁾ しかし申詩の場合は元詩の太平とはうってかわって、一種の混亂を寫し、「鴻雁哀鳴の聲のうち、人民の饑えと寒さの生活を暗示する」（選注者）のは確かであるが、それはさらに北方異民族によってもたらされたものであることをも意味するにちがいない。讀者はここで杜牧「早鷹」詩の、⁽²⁰⁾

金河秋半虜絃開 金河 秋半ばにして虜絃開き

雲外驚飛四散哀 雲外に驚飛して四散哀し

の例を思いおこすべきであろう。清初の大明湖は、その名が直接に前朝を追慕させるものであったのもさることながら、實は明末一六三九年の濟南陷落の際の受難の歴史をもっているのである。その事件の一端は、20方文に、實姉一家の被災を通して歌った七言九二句の長編「大明湖歌」⁽²¹⁾によって覗い知ることができる。王詩の連作四首（本書採録は其一首のみ）の場合、その痕跡をじかに詩句に見出すことは難しいが、作者にとって一八年前のこの事件をその胸のうちに置いてみることは無駄ではないだろう。ましてこの詩が「郷試の際とて、名ある文人が大明湖に雲集していた」⁽²²⁾

ときに作られたとするならば、いささかの意味をもつはずである。なお、この詩が盛んに唱和された事情を伝えるものとして、選注者が17冒襲の「和阮亨『秋柳四首』詩原韻」(六二頁)を用意し、一方で24顧炎武「賦得秋柳」(八九頁)をもあわせ採録しているのは妥當である。顧詩は選注者の明言こそ無いが、日本では、「明らかにこれに和したものと(23)と思う」とされ、あるいは「和するよりも對抗の意識が強いと思う」(24)などとされる作品である。

ところでBグループの最後に位置する89査慎行にたいして、選注者が「王士禛と並んでこの時期の第一流の詩人と稱される」(前言八頁)との高い評価を與えるのは、従來の文學史などには見られなかった新しい傾向である。これまでの詩人がおしなべて典故の使用を作詩の重要な條件としていたのは異なるところに、この詩人の「描寫が細緻で、意境は清新」(二七四頁)とされる特色が生まれるのだろう。たしかに讀者はここに至って一種の解放感を覺えるにちがいない。

さきに咏史詩について觸れたが、「前言」の指摘はつきごとおりである。「一八世紀以降の清朝支配下の中國では、……清朝の政治的文化的な厳しい統制によって、また表面的な「盛世」の局面に惑わされて、詩人たちは現實を正視するとか現實を反映することを忌諱したり回避したり、あるいは稀薄にした。彼らはしばしば山水の模寫や風月の吟味、あるいは咏史とか咏物をかりて個人的な閑情や興趣、不平や憂鬱を敍べた」(二頁)。一八世紀の始まりは康熙三九年、詩人でいえば王士禛六七歳、査慎行五一歳、そして98沈德潛は二八歳、108厲鶚は九歳である。いわゆる文字の獄については、總論としても詩人個々についても選注者には具體的な指摘を缺くが、とくにCの「盛世」の詩人たちを取りあげる際には落してはならないものである。本書の詩人たちには限定しながら、主に鄧之誠『中華二千年史』卷五・中「清代文字獄簡表」(一一三頁)によって見ておこう。

順治一八年一六六一 11金人瑞の「哭廟案」

「その起因は學生運動であったというべきで、つまり書生と貪官との對決であった。」(陳登原『金聖歎傳』六

三頁。⁽²⁵⁾

順治一八年 莊廷鑑「明史稿案」

「崇禎一朝の事を補うに、中に昭代を指斥する語多し」
(全祖望「江浙兩大獄記」⁽²⁶⁾)。

康熙五〇年一七一 戴名世「南山集案」

「罪狀」は明白で、一つは永曆等の南明の朝廷の年號を用いたこと、二つは南明の抗清の史實を流布したと⁽²⁷⁾。

雍正四年一七二六 查嗣庭「試題案」

試題の「維民所止」が雍正の頭を刎ねるものと見なされ獄死。兄の89查慎行は釋放、弟の92查嗣璫は流罪。

雍正六年 54 呂留良「文選案」

「呂留良評選の時文、……内に夷夏の防、及び井田封建等の語有り」(『清實錄』雍正七年五月乙丑の條)⁽²⁸⁾。

雍正八年 63 屈大均「詩文案」

「南明の清への抵抗に殉節した人物を表彰し、投降者を非難し、……また「辮髮令」にたいして憎惡をあらわした」(『嶺南三家詩選』前言五頁)⁽²⁹⁾。

書 評

このあとも「簡表」には詩鈔案も含め一七件が續くが、本書の詩人たちに直接の關係はないようなので中略する。以上の案件がむしろ個別的であったのにたいして、従来の詩人ないしは作品すべてに網羅的な検討が加えられるきっかけをなしたのが、

乾隆二六年一七六一 98 沈德潛「選輯國朝詩別裁集案」⁽³⁰⁾

である。同二四年刊の『國朝詩別裁集』の序文を沈氏が皇帝に求めたところ、皇帝側は、「(錢)謙益ら諸人は明朝の達官爲りしも、復た本朝に事う。……其の人を要するに忠孝爲るを得ず」と、いわゆる貳臣論を主たる理由としてこれに大幅な改削を加えることになった。沈氏自定本と、同二六年に勅命によって改定された御定本とを比較すると、本書の詩人たちでは、2 錢謙益、8 傅山、11 金人瑞、12 吳偉業、17 冒襄、21 周亮工、26 龔鼎孳、27 侯方域、63 屈大均、65 吳兆騫らが全面的に削除され、作品のみの削除では、89 查慎行の「汧梁雜詩」(二八四頁)は、宋太祖の陳橋驛での兵變を疑案であると詠んだのが忌諱に觸れたのであろうか、また「秦郵道中即目」(二八六頁)は、水患をとりあげて「濁

浪侵南」と表現したのが清軍の南下を連想させるからであろうか、ともにその対象とされている。もっとも、この時点では以上にあげた詩人の作品を個人的に閱讀することまでを禁じたわけではないようだが、八年後の乾隆三四年には錢謙益の詩文集が銷毀され、ついで四庫全書の開館編輯と平行して、「乾隆三九年には禁書の調査と措置を明記した諭旨が下っていらひ、この事業は延々と二十年にわたつて續けられたが、審査の重點が置かれたのは、明末清初の人の著作のほかに、いわゆる「貳臣」の著作であつた。」⁽³²⁾ この二点を主な事由として、姚覲元『清代禁燬書目』⁽³³⁾によれば、結局、2 錢・54 呂・63 屈を三大惡とするほかに、「全燬」「抽燬」「違礙」など程度の差こそあれ、3 談選・6 馮班・12 吳偉業・13 黃宗羲・14 杜濬・15 方以智・17 冒襄・18 李漁・19 錢澄之・20 方文・21 周亮工・24 顧炎武・26 魏鼎莘・27 侯方域・28 吳嘉紀・31 尤侗・34 張煌言・37 黃生・66 陳恭尹、ひいては84 洪昇の『稗畦續集』に至るまでがブラック・リストに登ることになつたのである。

詩の作法においても師傳相承があるとすれば、Cの「乾隆・嘉慶期の『盛世』の詩人」たちには、いささか極端な言いかたをすれば、錢謙益の影を抜きとられた王士禛の作品以外には範とする作品がなかつたのではあるまいか。そのいっぽうで、清朝成立後一世紀の時點に立つた詩人たちにとつて、明朝への懷舊とか清朝への反撥といった禁書の事由が、詩人自身の心の中で風化し、作詩の關心事としては遠のきつたことも事實だろう。

とはいへ、さきの「前言」の指摘にもあつたように、この時期にも咏史詩はやはり作られており、たとえば126 蔣士銓と153 舒位の二首の「梅花嶺弔史閣部」(四一〇頁、五二八頁)は、清軍の南下に抵抗して揚州で戦死した史可法の、「忠貞をたたえ、明朝の滅亡を哀悼した」(選注者、四一〇頁)作品であり、舒詩には、

還剩幾分明月影 還ま了幾分を剩ますま明月の影

と、王朝と雙關の語も用いられる。この現象はいかに解釋すればよいのだろうか。「乾隆期六〇年内に起つた七五の文字の獄のうち、四庫開館(乾隆三八年)後一〇年内に起つ

た文字獄は四八の多きにのぼっている⁽³⁴⁾ ことからすれば、蔣詩は乾隆一三年作、舒詩は嘉慶八年一八〇三作と、それぞれ前後に二〇年ばかりの差があるが、それだけで説明がつくとも思えない。というのは121袁枚の「謁岳王墓」⁽³⁵⁾（三九三頁）は、乾隆四四年の作なのである。朦朧を愛した王士禛にたいして袁枚は明晰を好んだと思うが、この詩も明らかに「岳飛を頌揚した」（選注者）ものであるにちがいない。岳飛の「孤憤」も民族的抵抗という現實感をすでに失い、單なる一般的理念としてのみ扱われているにすぎないと見るべきなのだろうか。この時期に宋の故事を用いた例としては、このほかにも、101黃任「西湖雜詩」⁽³⁶⁾（三三三頁）の岳飛、袁枚「澶淵」⁽³⁷⁾（三八五頁）の寇準、127趙翼「過文信國祠同訪茅作」⁽³⁸⁾（四二二頁）の文天祥、138洪亮吉「宗忠簡祠」⁽³⁹⁾（四六六頁）の宗澤、139吳錫麒「讀放翁集」⁽⁴⁰⁾（四六八頁）の陸游、141黃景仁「虞忠肅祠」⁽⁴¹⁾（四八〇頁）の虞允文などがあげられるが、總じて、民族的抵抗を示唆する典故と思想統制との關係については今後の検討にゆだねるほかはない。^(補注)

なお、選詩の適不適について私が云々するのはいまだそ

の任にあらざるところであるが、袁枚にかぎっていえば、右の引用でもわかるように選注者はその咏史詩を多く採っていて、この詩人が「詩歌に作者の眞の性情を表わし、新鮮で潑刺とした感覺の觸れあいをもたせざるべきだ」（前言一〇頁）とした主張が十分には裏づけられていない。たとえ「所見」⁽³⁶⁾の詩、

牧童騎黃牛 牧童 黃牛に騎り

歌聲振林樾 歌聲 林樾を振わす

意欲捕鳴蟬 意に鳴蟬を捕えんと欲し

忽然閉口立 忽然 口を閉じて立つ

あるいは「即事」⁽³⁷⁾、

盆梅三株開滿房 盆梅三株 開きて房に滿つ

主人坐對心相忘 主人 坐して對すれば 心相い忘る

偶然入內女兒怪 偶然 内に入って女兒は怪しみ

問爺何故衣裳香 問うに爺よ何の故にか衣裳香ぐわしきか

と

など、より直截にこの詩人の特徴を示す作品をも採るべきであった。

さてBグループの詩人では、山東が清朝に最初に降つた

ことの反映として、25宋琬・69王士禛など、この省の出身

者の活躍がめざましかったのに比して、Cグループの詩人

になると、「浙派」の領袖（前言九頁）である108厲鶚をは

じめ、江浙地方の人々が多く登場する。この地方を代表す

る杭州・蘇州・揚州などの都市は、一世紀前には明清の熾烈

な戦闘がくりひろげられた場所であり、南京や鎮江とともに

に、以前の詩人たちによって、宋の故事をもちいて意味深

長に歌われることしばしばであったが、今やそのような跡

をとどめることは少なくなり、いわば陽光のもとでの自然

の風情や私的な生活が好んで寫される。ひとつの象徴とし

て牽強を恐れずにいえば、Aの詩人は19錢澄之「梅花」（六

八頁）がその「高潔さでもって氣節を堅持する志士になぞ

らえた」（選注者）ように梅花の香氣を好み、Bの詩人は69

王士禛の「秋柳」（二二六頁）のように柳に留連の情を託し

たのたいして、Cの詩人は、103王丹林「白桃花、次乾齋

侍讀韻」（三三七頁）、107馬曰璐「杭州半山看桃」（三三一頁）、

110嚴遂成「桃花」（三五四頁）のように、桃花の爛漫に満足

していたかに見える。

以上、「前言」で區分された四期の詩人たちのうち前三

期について見てきたが、ここで全期にわたつての、本書の

選人選詩の特徴と思われる點を補つておこう。

全國的な總集における同郷詩人の顯彰は、かつての張維

屏『國朝詩人徵略』³⁸が廣東の詩人についておこなつた例が

あるが、本書においても福建になじみのふかい詩人が、目

だたぬ程度にはあるが最屢されている。早々に登場する

16高兆は同省の出身で、無名ではあるが、その詩「荷蘭使

舶歌」（五七頁）³⁹は清初の國際情勢の一端を寫していてユニ

ークな存在である。75丁煒は王士禛から「閩詩派」の一人

として評價されたことがある。⁴⁰同様のことは滿族詩人の採

録についてもいえることで、93納蘭性徳に先んずる32（覺

羅）滿保は、康熙三三年一六九四の進士であり、閩浙總督

（在任は一七五一—一七二五）としては最初の滿族出身者であ

つた。いずれも本書の選注者の拔擢によって三萬の人海の

なかから浮上する機會を與えられた人々たちである。

それよりも、小説・戯曲の作家、ないしは文藝評論家にかなりの紙面がさかれていることは特筆すべきであろう。すなわち、11金人瑞をはじめ、18李漁は「傳奇十種」(選注者、六頁)の、23陳忱は『水滸後傳』の、78蒲松齡は「聊齋志異」の作者であり、『長生殿』の84洪昇には、さらに61朱彝尊や95曹寅の關係する作品が用意されているし、87孔尚任の『桃花扇』に關聯しては、その主人公である27侯方域本人を登場させるほか、97趙執信・118王又曾・151張問陶の詩題・詩句によって評判のほどを裏うちする。このうち洪昇と孔尚任に關してはつとに鈴木虎雄博士の論文「『桃花扇』傳奇作者の詩」があるが、兩家の文集が博士の目睹しうるところでなかったのは惜しまれる。⁽⁴⁾ つぎに「紅樓夢」の作者自身は裏方に退くものの、95曹寅は曹雪芹の祖父にあたり、129敦敏・134敦誠の滿族兄弟はその友人である。これら、むしろ他のジャンルで有名な人々が一方では詩人でもあったことは、清代の文藝界の一つの特長といえよう。詩の巧拙はともかくとして、詩人の品等づけも必ずしも定着していない現段階では、選注者の試みはきわめて好ましいも

のである。加えて、小説・戯曲の周邊にある藝能界の賑わいを反映する詩の材料も忘れられていない。たとえば38毛奇齡の「贈柳生」詩(三六頁)に歌われる説書家の柳敬亭は、吳偉業など明末清初の詩人たちの多くが評判にした人物であるし、當時の庶民的な藝能としては、119錢載の「小店」(三七八頁)が「演唱」の、126蔣士銓「弄盆子」(四一一頁)が「雜技」の、「象聲」(四一二頁)が「口技」の、141黃景仁「獻縣汪丞坐中觀伎」(四八五頁)が「雜技」の、それぞれ實體を讀者に傳えてくれる。

最後に指摘すべきは、本書が、政治や社會の諸相を直寫ないしは批判した歌行詩の約五〇首でもって、全時代のいわば背景を用意するとともに、清代の詩人に共通する良心ともいうべき側面を語らせていることである。これはもとより、新中國成立らしいリアリズムの尊重という姿勢を選注者も堅持している表われであるにはちがいないが、文學史の敘述ではしばしば平板にあるいは教條的に流れる弊害もなく、敘情にたいする敘事という重層的な構造をつくりだすのに成功している。

いっぽう、私が本書にたいしてもつ一番の不満は、Dグループ、つまり「道光・咸豊期」の詩人たちをほとんど採録していないことにある。北大中文系『中國文學史』(四)が、毛澤東の「中國革命と中國共產黨」第三節「現代の殖民地・半殖民地と半封建社會」での指摘に據りながら、「一八四〇年の鴉片戦争は中國近代史の序幕を開いた」(二〇五頁)とするように、本書も、道光の残る一〇年と咸豊、そして同治・光緒・宣統とつづく晩清の七〇年間を對象外に置いている。しかしながら王朝の区分によって「清詩選」と銘うつ以上は、やはり一九一一年までを對象とすべきであると、私はおもう。これは單に「清代」という字づらにこだわるだけではない。清代の詩を一つの完結した世界において見る場合に、この前に位置するCの「乾隆・嘉慶期の『盛世』」の詩が、一種弛緩した精神状態のもとにあるのにたいして、この時期には、政治的社會的に緊迫した状況に對應して詩人たちが再び緊張をとりもどし、最後の王朝の最後にふさわしいかたちで前近代の幕を閉じるからである。それも、選注者が姉妹篇として掲げた近代詩の選集が本書の實の姉

妹としてスムーズにつながるのであれば、まだしも納得はできる。しかし選注者が後を托するのは、一九二三年刊の陳衍編『近代詩鈔』と、一九六三年刊の北京大學中文系編『近代詩選』の二種であり、兩者を單純に並記するだけでは、讀者としてはとまどうばかりである。なぜなら、後者は前者について、「魏源以後の系列の進歩的な詩人の詩にたいしてはあまり興味をもたず、詩の選擇もきわめて少なく、甚だしきは一首も採っていない」(前言三六頁)とし、要するに「近代のいくつかの主要な腐朽詩派の作品を展示したものである」(同)と決めつけているように、兩者は「根本的に對立している」(同三七頁)からである。少くともこの對立にたいして、本書の選注者はその柔軟な目差しを當てるべきであったし、できうれば具體的な選人選詩の操作を通して、たとえば一八四一年に死んだ龔自珍を清詩の流れの中に立たせてほしかったとおもう。

以上、本書の第二の前言を私なりに試みたごとき面もないではないが、最後に、本書の詩人の經歷とか作品の解釋

などについて、未熟な調査によりつつも、氣づいたところを列記することにした。

19 錢澄之 「梅花」詩（六八頁）は「おそらく隠居時代に作られたものだろう」と選注者が指摘する、その「おそらく（可能）」の語は不要である。この詩が錢氏の『田間詩集』⁽⁴²⁾の卷九「江上集」に收められた辛丑（順治一八年一六六一）の作だからである。全十首のうち本書採録の「何處花先放」は其九首、「離離壓殘雪」は其五首。ちなみに「催完糧」詩（六六頁）は、卷七「江上集」所收、庚子（順治一七年）の作（詩題を「催糧行」に作る）で、「捕匠行」（六七頁）は卷八「江上集」所收、辛丑年の作、いずれも語句にいくつが異同もある。

21 周亮工 詩人紹介に『賴古堂詩鈔』のみを擧げるのは不備で、上海古籍出版社の清人別集叢刊の一つにも『賴古堂集』上・下が一九七九年五月に影印されている。「自劍津發燕江次西溪」（七〇頁）はその卷四（五言律）に所收。同卷のすこし前に「今年予四十」云々と題する詩があることから、順治八年一六五一かその直後の作であることが分る。

書 評

いっぽう、『清代職官年表』の「布政使年表」（一七六二頁）によると、周亮工は順治六年五月に福建按察使から福建右布政使に遷り、同一〇年に左布政使、同一一年には左副都御史に遷っている。したがって選注者がこの詩を「作者が福建布政使であった時に作られたと思われる」と指摘するのは正しいが、「三藩の亂」以後の、この地方の荒涼としてうらぶれたありさまを描く」とするのは、まったくの事實誤認である。三藩の亂は順治八年からは一二年後の康熙一二年に始まるからである。したがってこの詩は、南明の魯王朱以海が舟山から廈門に走り、かたや鄭成功が漳浦を回復するなど、清朝の支配がまだゆきとどかなかった福建地方で、閩江上流を巡視していたときのこまを寫したものである。

31 尤侗 「清初の『罔地』」（選注者）を描いた「煮粥行」（二一九頁）の第二〇句、

前歲盡被豪強圍 前歲盡こころむ被こころむ豪強の圍

の「豪強」は、『西堂詩集』⁽⁴³⁾所收「右北平集」では「滿州」に作る。おそらくこちらの方が原初の用語であろう。本書

は張應昌編『國朝詩鐸』⁽⁴⁴⁾卷一六に據ったのであろうか。もつとも第一八句の、

携男抱女充車牛 男を携え女を抱きて車牛に充つ

は、「充」を別集でも『國朝詩鐸』でも「無」に作る。この詩、おそらくは順治一一年の作であらう。

44 陸次雲 選注者紹介に「約一六六二年前後在世」(二四八頁)とあるが、『國朝杭郡詩輯』⁽⁴⁵⁾卷五によれば、康熙一八年一六七九の博學鴻詞に薦試されている。

48 鄧漢儀 「約一六六一年前後在世」(二五七頁)とし、加えて「康熙一八年、試博學鴻詞科」と記されるが、87孔尚任の『己巳存稿』⁽⁴⁶⁾つまり康熙二八年の作には五古「哭鄧孝威中翰」を収めるので、その卒年は一六八九と確定できる。また現存の清詩總集としては最も早い時期に編まれた『天下名家詩觀』初集・二集・三集⁽⁴⁷⁾の編輯者であることも、一言紹介されてしかるべきだろう。

49 許虬 「順治八年舉人」(二五八頁)とあるが、『國朝詩別裁集』卷五および鄧之誠『清詩紀事初編』⁽⁴⁸⁾卷三(三二四頁)によれば、さらに順治一五年一六五八の進士である。

50 王攄 「約一六六三年前後在世」(二五九頁)とだけ記されるが、『清詩紀事初編』卷三(四〇〇頁)によれば生卒年は明らかで、一六三九—一六九九、となる。清人別集叢刊『蘆中集』⁽⁴⁹⁾の「出版説明」も同様である。したがって順序は74徐鉉のあたりまでさがる。「謁伍相祠」(一五九頁)はその卷一に所收、丙申(一六五六)二月から庚子(一六六〇)一〇月の間の作である。

51 董以寧 「約一六六六年前後在世」(二六〇頁)とあるが、やはり『清詩紀事初編』卷四(四二九頁)の推定だと、その生卒年は、一六二九—一六七〇となる。若くして45陳維崧らと「毘陵四才子の目有り」とも記される。

55 劉廷璣 「約一六七六年前後在世」(二六八頁)とあるが、江西按察使であったのは、『清代職官年表』によれば、康熙四〇年一七〇一の五月から同四三年二月までのことである。

56 張遠 「約一六九二前後在世」(康熙三八年(一六九九)舉人)(二六九頁)とあるが、これも『清詩紀事初編』卷八(九七三頁)には、「康熙五十五年選官雲南祿豐知縣、卒于官、

年七十」とあり、その生卒年は、一六四七—一七二六か、せいぜい二・三年のずれしかないことになり、順序も86番あたりまで下ることになる。

57 景星灼 生卒・経歴いずれも記載がないが、『兩浙輶軒錄』⁽⁵⁰⁾ 卷一三に、「庚子秋疾作、……浩然而逝、……壽六十有九」と記されるから、生卒年は一六五二—一七二〇と確定され、順序は90番あたりまで下る。

68 李因篤 卒年は不明とされているが、『清詩紀事初編』卷八(八六九頁)には、康熙三十七年より「當卒于此一二年内」とされるから、同三五・三六年、一六九六・七の卒と考えられる。

84 洪昇「衢州雜感」(二五九頁)を「七首」に作るが、『稗畦集』では「十首」あり、本書採録は其二と其九首である。

95 曹寅 七律「讀洪昉思『稗畦行卷』感贈一首、兼寄趙秋谷贊善」(三〇四頁)の第五・六句、

禮法誰嘗輕阮籍 禮法 誰か嘗て阮籍を軽んぜん

窮愁天欲厚虞卿 窮愁 天も虞卿を厚くせんと欲す

について選注者は、「二句は阮籍・虞卿になぞらえて洪昇を

書 評

慰藉した」ものだとする。たしかに後の句は、『史記』卷七六虞卿列傳の贊に、「虞卿は窮愁に非ずんば、亦た書を著わして以て自ら後世に見^{あら}わること能わざらんと云う」とあることから、著書にふれて洪昇になぞらえたものであるが、前の句は洪昇ではなく趙執信を指す。それでこそ詩題に明示した二人の友人への配慮が完了されるのである。すなわち、趙氏の七古「與史生升衢金蹕對酒、話京師舊事」⁽⁵¹⁾に、

周郎從道戀紅牙 周郎は從道 紅牙を戀い

阮籍由來少青眼 阮籍は由來 青眼少なし

と、趙氏がみずからを阮籍になぞらえたことを、曹氏は意識に置いているのである。なお、曹詩の「天欲」は『棟亭詩鈔』⁽⁵²⁾ 卷四では「天亦」に作る。

97 趙執信 七絶「昭陽湖行、書所見」詩(三二二頁)の初二句、

屋角參差漏晚暉 屋角參差として晚暉を漏らし

黃頭閑緝綠簑衣 黃頭閑かに緝ぐ綠簑衣

のうち、選注者の「黃頭は老年の人」と注するのは誤解。

趙蔚之・劉聿蠡選注『趙執信詩選』⁽⁵³⁾が『漢書』卷九三鄧通傳を引いて、「黃頭はむかし船をあやつる人を黃頭郎と稱した」(二〇七頁)と指摘するのが正しい。「綠簾衣」が張志和の「漁父歌」(『全唐詩』卷三〇八)に用いられている語であることもその傍證となるだろう。

103 王丹林 採録された七律「白桃花、次乾齋侍讀韻」(三二七頁)の全文はつぎのとおりである。

相逢不信武陵村

相い逢うは信せず武陵村のみなりと

合是孤峰舊托根

合まじに是れ孤峰舊托の根なるべし

流水有情空蘸影

流水は情有るも空しく影を蘸ひたし

春風無色最銷魂

春風は色無くして最も魂を銷ひす

開當玉洞誰知路

玉洞に開き當るも誰か路を知らん

吹落銀牆不見痕

銀牆に吹き落ちて痕を見ず

多恐賺他雙舞燕

恐ること多きは他に賺あぶさるる雙舞の燕

誤猜梨院繞重門

誤あやまって梨院かと猜うたがいて重門を繞めぐるを

詩題の「乾齋」なる人物について選注者には何らの注記もないが、陳元龍、字は廣陵、號は乾齋のことであるにちが

いない。浙江杭州府海寧州の人であるから、錢塘縣(一に仁和縣ともする)の王丹林にとっては同郷人である。傳が『國朝杭郡詩輯』卷四、『兩浙輶軒錄』卷一一、『清史稿』卷二八九などに見える。その『愛日堂詩』⁽⁵⁴⁾卷九「環召集」三(乙亥・丙子・丁丑)に、王氏次韻の原詩である「白桃花」六首のうちの一が見える。

淨洗鉛華謝俗喧

鉛華を淨洗して俗喧を謝し

妖紅隊裏結瓊根

妖紅隊裏 瓊根を結ぶ

梨雲一片曾同夢

梨雲一片 曾て夢を同ともにし

梅雪三分與借魂

梅雪三分 與ともに魂を借る

人面相看春有恨

人面 相い見て春に恨み有り

漁舟重過月無痕

漁舟重ねて過ぎるも月に痕無し

不逢幽賞誰知重

幽賞に逢わざれば誰か重きを知らん

漠漠含情畫掩門

漠漠と情を含みて畫にも門かどを掩おさう

詩の前後の配列からして、「乙亥」つまり康熙三十四年一六九五の作であることは明白である。

いっぽう王丹林については『國朝杭郡詩輯』卷五の略傳に、「字赤抒、號野航、仁和人、康熙年郡拔貢、官中書科

中書、有野航集十卷。」また「野航年三十、始中明經、踰三年試爲教習、又四年得官、又八年而以疾歸、……卒年五十一」とあるのによれば、首都北京で陳元龍に接し得てこの次韻詩を作ったのは、三七歳で内閣中書科中書舎人の官に就いてから四五歳で歸郷する間のことであろう。

さて選注者はあるいは杭州での作とみなしているのではないかとおもいますが、その初二句について、「白桃花が梅花を彷彿とさせることを描く。……孤峰は杭州西湖の孤山を指し、梅の樹が多い」と、わざわざ梅とからませるのは腑に落ちない。白桃花の咲く北京の、おそらくは乾齋の屋敷の閉ざされた門の内を桃花源になぞらえているとすれば、「孤峰」はたぶん、陶淵明「桃花源記」の「一山」を指すのだろうが、孤山を指して、當地で觀る桃花も實は故郷の桃樹と根がつながっているということ、同郷の誼みを示したとみることも可能である。ちなみに孤山に限定はできないが杭州にも桃の名所があることは、本書107馬曰璐の「杭州半山看桃」の詩(三三一頁)によって分る。ついで第二聯について選注者が、「桃花の色が白く、流水もその姿

を映し出せず、その氣のある者がこれを見てもいっそう落膽するばかりだ」云々と注記するのも、よく解らない。また『國朝詩別裁集』卷二にこの詩を取りあげて、沈德潛が「剪刻の痕無く、天然の趣有り。一時に和する者、皆な其の下に出づ。輦下の詩人、鈔寫すること幾遍なりしか」とたたえ、『國朝杭郡詩輯』(十六卷本)卷四は、この第二聯が「時に絕唱なりと推さる」としるす、その評判のほどはともかくとして、沈氏の解釋もすなおには受取れない。私にはこの二句が、乾齋その人を白桃花になぞらえ、流水には影のみ、春風には芳香のみと、その恩惠を待つ身の確かな手應えの無さをかこっているようにしかおもえないからである。第三聯もやはり門内に通してもらえぬ歎きであるようにおもふ。

なお、王丹林の生卒年次については、選注者は「約一六九二年前後在世」と記すだけだが、さきの『國朝杭郡詩輯』の記載と陳元龍との關係からみて、遅くしては康熙四八年一七〇九の卒(とすれば一六五九年生まれ)となり、いっぽう、顧嗣立の『閩丘詩集』卷二〇、甲申(康熙四三年)の作によつ

て、おそらくは王氏の歸郷後、錢塘の吳焯の招きで顧嗣立や洪昇らと飲酒作詩の會をもったことが明らかである以上、その死は早くともこの年（だとすれば一六五四年生まれ）より

後ということになり、本書の順序としては95番あたりに繰りあがるわけである。また、その歸郷にあたっては當時の名士であった王士禛や高士奇（一六四五—一七〇四、錢塘の人）の「贈言」があった旨、『國朝杭郡詩輯』の略傳に見える。

105 黃子雲 號は野鴻の五律「大洋」（三二九頁）が作られたのが、「清朝の冊封使者に隨從して琉球に入った時」（選

注者）とされる、その使者の名を、『國朝詩別裁集』卷三〇での沈德潛の注記では、「時徐激齋太史奉命冊封琉球、野鴻隨行」と姓と雅號で明記するが、この人物が『清代職官年表』「特派使節年表」（三〇一—二頁）の、「康熙五七年、戊戌（二七一八） 諭祭琉球國故中山王尙貞・尙益、並冊封世曾孫尙敬爲中山國王 正使（滿）海寶檢討、副使徐葆光編修」とあるうちの副使と、たぶん一致するとおもわれるが、『國朝詩別裁』卷二三および『江蘇詩徵』⁵⁵卷六の徐葆光略傳には「字亮直、江南吳縣人」としか記さないので、確かなと

ころは分らない。なお、黃子雲は『國朝詩別裁』および本書では崑山の人とするが、『隨園詩話』卷三では蘇州の人とされ、それだと徐葆光と同郷である。

107 馬曰璐 その在世期間を選注者は「約一七一九年前後」（三三一頁）とするだけだが、その生年については兄馬曰瑄のそれが一六八八年（卒年は一七五五年）であることが参考となり、その卒年については、曰璐に「哭厲樊榭」の詩が⁵⁶あることから、108 厲鶚の卒した一七五二年より後であることが分る。

150 焦循 この詩人の別集『雕孤集』⁵⁷卷二によっても、『國朝詩鐸』卷一四（災荒總）によっても、本書採録の「荒年雜詩」（五〇八頁）の第一〇句と一一句との間には、

休問何以耕、休問何以餧

の二句が入っている。

154 郭麐 本書採録の三首はすべて『靈芬館詩四集』⁵⁸に見える。いずれも製作年が明示されているから、これによって配列しなすと、「法華山望湖亭同汪吳二子作」（五三二頁）が卷四『皋廡集』所收、「辛未正月至十月」つまり一八

一一年の作。「新晴即事」(同頁)が卷九「蘧庵集」所收、「丙子」一八一六年作。「書悶」(五三二頁)が卷一一「蘧庵集」所收、「戊寅」一八一八年作である。

[注]

- (1) 上海古籍出版社、一九七九年一月以降刊。
- (2) 上海古籍出版社、一九七九年一〇月以降刊。
- (3) 上海中華書局、一九一六年刊。
- (4) 臺灣商務印書館・人人文庫、一九六七年八月。
- (5) 上海古籍出版社、一九八二年一月。
- (6) 集英社・漢詩大系22、一九六七年六月。
- (7) 入谷仙介・福本雅一・松村昂『近世詩集』所收。朝日新聞社・中國文明選9、一九七一年五月。
- (8) 明治書院・中國の名詩鑑賞10、一九七六年四月。
- (9) 一九二九年刊。
- (10) 孔尙任については『晚晴簃詩匯』卷三九に「國初」の人とみなし、納蘭性徳については本書の紹介で「清初の著名な詞人」(二九八頁)とする。
- (11) 中國歴史小叢書の一。中華書局、一九八〇年刊。ただし詩題は未詳。手鈔本『呂晚邨先生詩集』(民國六二年臺北臺灣商務印書館景印)には載らない。後放をまつ。
- (12) 康熙一〇年一七六一作、『漁洋續集』所收。

書評

- (13) 北京大學中文系文學專門化一九五五級集體編著『中國文學史(四)』一〇頁、人民文學出版社、一九五九年。
- (14) 中國科學院文學研究所中國文學史編寫組編寫『中國文學史』一〇一四頁、人民文學出版社、一九六二年。
- (15) 王氏の入蜀後の山川描寫の詩には杜詩的なものがあるとする「前言」の指摘は、あきらかに沈德潛の『清詩別裁集』卷四「朝天峽」詩の批評に據っている。拙稿「沈德潛と『清詩別裁集』」一五九頁(『名古屋大學教養部紀要』二三輯A、一九七九年)参照。
- (16) 『池北偶談』では、本詩の第一句「倚檻春風玉樹飄」は、「綺閣臨臨春玉樹飄」に、第三句「興懷無限蘭亭感」は、「興亡何限蘭亭感」に作る。
- (17) このエピソードについては、高橋和巳『王士禛』九五頁(岩波書店、中國詩人選集第二集、一九六二年)にも言及されている。
- (18) 高橋前掲書五五頁参照。
- (19) 『遺山先生文集』卷二。張傳實・李伯齊選注『濟南詩文選』二八頁所收、齊魯書社・一九八二年四月刊。また山東社會科學院語言文學研究所主編『詠魯詩選注』六〇頁所收、山東人民出版社・一九八三年八月刊。
- (20) 『樊川文集』卷三。
- (21) 方文『蝨山續集』魯游草、所收。上海古籍出版社、一九七九年一〇月影印。

- (22) 高橋前掲書三頁。「諸名士が明湖に雲集した」ことは、高橋氏も引き本書選注者も引用する王氏の「菜根堂詩集序」に記されているが、それが郷試のためであったか否かは定かでない。順治十四年一六五七は全國的郷試が行われた年であるが、『清代職官年表』(中華書局・一九八〇年七月刊)第四冊郷試考官年表によると、山東省に限って、施行月日が「(原缺)」とされ、同考官も「(降三調)」とされるのみで、施行された保證が明白でないからである。
- (23) 近藤、前掲書四八頁。
- (24) 清水茂『顯炎武集』九〇頁、朝日新聞社・中國文明選7、一九七四年一月。
- (25) 上海商務印書館・國學小叢書、一九三五年四月刊。
- (26) 『鮎埼亭集』外編卷二二。
- (27) 『安徽史學通訊』一九五九年四・五合刊——鄧天挺主編『明清史資料』下一八五頁、天津人民出版社、一九八一年八月所收の節録による。
- (28) 山口久和「呂留良と張倬投書案」四〇頁、京都大學中國哲學史研究室『中國思想史研究』第三號、一九七九年一月、を参照。
- (29) 劉斯奮・周錫觀選注、廣東人民出版社、一九八〇年一月刊。
- (30) 鄧氏はこの案件を乾隆四一年に置くが、事の始まりはもっと早い。詳しくは拙稿「沈德潛と『清詩別裁集』」二六一頁以下参照。
- (31) 『清史稿』卷三一—沈德潛傳。
- (32) 劉漢屏『四庫全書』史話二〇—二二頁より抜粋。中華書局・歴史知識小叢書、一九八〇年一〇月。
- (33) 光緒八年一八八二記。
- (34) 劉漢屏、前掲書二五頁。
- (35) 『小倉山房詩集』卷二六には「謁岳王墓作十五絕句」に作る。
- (36) 『小倉山房詩集』卷二五。
- (37) 同卷二五。
- (38) 初編は道光一〇年一八三〇自序刊、二編は同二二年序刊。
- (39) この詩は『晚晴簃詩匯』卷一六所收。
- (40) 『漁洋詩話』卷下。
- (41) 『支那文學研究』所收、二三九頁以下、弘文堂、一九二五年一月刊。洪昇の詩集は「康熙乙卯」一六七五題記の『嘯月樓集』七卷の鈔本が靜嘉堂に藏せられているが、中國では『稗畦集・稗畦續集』が古典文學出版社より一九五七年九月に刊行された。また孔尙任の詩集は、中國から『孔尙任詩』が北京科學出版社より一九五八年に、『孔尙任詩文集』が中華書局より一九六二年八月に刊行された。
- (42) 康熙二九年一六九〇序刊。
- (43) 康熙二五年刊。
- (44) 同治八年一八六九刊。
- (45) 三十二卷本、孫振棫重輯、同治一三年刊による。以下も

同じ。なお十六卷本は吳翫輯、嘉慶五年一八〇〇刊。

(46) 『孔尚任詩文集』一六四頁。中華書局、一九六二年八月刊。

(47) 初集は康熙一一年刊、二集は同一七年刊、三集は同二九年序刊。

(48) 中華書局、一九六五年一月刊。

(49) 一九八一年二月、康熙刻本影印。

(50) 阮元輯、嘉慶六年一八〇一刊。

(51) 『飴山詩集』卷一〇所收。

(52) 清人別集叢刊、一九七八年一月、康熙刻本影印。

(53) 齊魯書社、一九八三年三月刊。

(54) 乾隆元年刊。

(55) 王豫輯、道光元年一八二一自序刊。

(56) 阮元輯、『淮海英靈集』乙卷三所收。嘉慶三年一七九八刊。

(57) 阮元輯『文選樓叢書』所收、道光四年刊。

(58) 道光三年一八二三刊。

〔補注〕

殿榮の『王述庵先生祀年譜』に、乾隆四五年一七八〇の高宗第五次南巡の経路と行事を詳しく記している。その一部を引用しておく。

(二月) 十四日、揚州に至り、命を奉じて宋の宗忠簡公澤

書評

・明の史忠正公可法・本朝張文貞公玉書を京口に祭る。二月十三日、蘇州に至り、命を奉じて吳泰伯・范文正公仲淹・湯文正公斌・陳恪勤公鵬年・張清恪公伯行の祠を祭る。
(中略) 三月初二日、杭州に次し、命じて、陸宣公(贄)・錢武肅王(鏐)・岳忠武王(飛)を忠肅公の祠に祭らしむ。

これによって、Cの詩人たちの詠史詩が政府的行事への参加であったと考えて、ほとんどまちがいないだろう。このような皇帝みずから南宋および明の忠臣を祭る行事が、いつから始まったのか、それに應える詩が、誰によって、どのように詠まれているかは、今後の調査にまつ。

(京都府立大學 松村 昂)